

やはり、子供達が後を継ぐと言うのが嬉しい私たちです

若者達が生き生きと機械整備

1月下旬、青森県の最も西部に位置している深浦町にある当農場の畑は一面雪野原です。例年は北西の風が強く、雪は畑を飛んでいくためところどころ地肌が見えるのですが、今年は風の弱い日が多く、雪はそのまま降り積もり、すべて一面の銀世界です。その雪のキャンパスの上に、うさぎやきじがときたま姿を見せます。

もちろん、雪に覆われた畑では、作業は全くありません。室内での機械の整備と、ダイコンの加工が、この時期の中心作業です。

ダイコンは、16cm用と一口用にカットする作業を行っています。ダイコンの製品メーカーが袋詰めする一歩手前の作業を請け負っているのです。いわば一・五次加工ともいえる仕事をしていることになるでしょうか。この作業が近年増えてきたために、かつては1月から2月にかけて休ませたパートの人達は、1日交替とはいうものの、この冬場も農場にきてもらっています。

8年産ダイコンは、現在（1月中旬）一次貯蔵量で約800tの在庫があります。完売する予定ですが、売れる時期が遅れることは、資金繰りの面からは望ましくありません。このあたりが大型経営のむずかしいところですね。

これまでの経験から、一時的に資金繰りが苦しくなる時があります。それでも、いろんな工夫をして、乗り越えてきました。共に働いている社員やパートの人達の給料の遅延は起こしたことがないというのは、ちょっとびり自慢できることです。

8年の売上は5億円ぐらいと見込んでいます。

が、これだけの収入がコスト、人件費にあつという間に吸い取られてしまうのです。経理感覚に優れた人材が必要なのはいうまでもありません。

加工ダイコンと並ぶ冬の作業の主体は、機械の整備です。農場には、今、トラクター16台、大型トラック2台、小型トラック3台、送迎バス3台、作業バン車3台、コンバイン4台、ポテトハーベスタ5台、ブームスプレーヤー3台、ブルドーザ2台などの農業機械があります。これら数多くの農業機械すべてを修理、整備してまうのです。夏場、無理させて、あるいは少しぐらいの不備がまんして使った機械は、特に念入りにオーバーホールして、完璧に整備し上げます。

社員の男たちは、この時期全員、機械整備工といっても過言ではありません。この整備が、春から秋にかけての畑での作業効率、ひいては、農場経営にも大きく影響するだけに、整備に従事している彼らの目付きは真剣そのものです。

機械の改造も行っています。機械がより作業効率を高められるよう、デイスカッションしながら、少しずつ改良を加えるのです。例えば、ダイコンの種まき機にうね立て機能をつけたりしているのです。機械をいじっている若者たちの腕はなかなか見事なものです。整備もするし、使いこなせるし、それが農場マンという気がします。

家族経営には、この機械の整備という経営感覚が、少し足りないのでは、と思います。いかがでしょうか。

広く外国農業を見聞

昨年も中国からの研修生を一人受け入れまし

た。去る12月17日にふるさとへ帰りましたが、雄大な規模には感心していたようです。中国からの研修生は、

平成3年から受け入れていますが、その最初の研修生である程岩松（33歳）君は、うれしいことに中国で黄金崎農場のような大規模農場をつくりたいという希望もついています。彼は、研修から帰ったあと、吉林省にある漢方薬を学ぶ専門学校の副学部長をしていたのですが、大規模農場のありかたを日本でもっと勉強したいということで、今年の6月から岐阜大学農学部大学院に留学しているのです。当農場での研修が、こうしたきっかけになったようで、彼はかなり真顔で、「中国には土地があふれている。狭い日本よりもいい農業ができるから、木村さん中国に乗り出しは」と

と言ってくれます。この話には心が少しゆれるときはありますが、中国進出は、とりあえず我が国の大企業たちにお任せしておきたいというのが正直なところです。

私事ですが、その彼が今年の2月に帰国して妻を連れてくるということになり、その身元保証人を私に頼みました。快くオーケーしたものの、その保証人が我が国政府へ提出する書類の多いことにはあ然としました。国際化がどんどん進んでいる今の時代に、信じられないことです。行革してもらわねばと本気で感じ入った次第です。

国際化といえば、農業の世界もいやおう無く、ポータラシ化が進んでいます。私は、この状況に農業者が対応していくためには、他国の事情をよく知らねばならないと、思っています。

このため、外国の農業事情を見に歩いています。ヨーロッパへ3回、中国へ4回、オーストラリアとニュージーランドが2回、アメリカ西海岸へ1回、ロシアへ1回、アジアはベトナムが1回です。



上：細部までの点検整備
下：ダイコンの選別作業

この中で、魅力を感じたのはドイツです。この

国へは平成元年に県の研修事業で派遣され、畜産農家へ3日間ホームステイもしました。それだけに、ドイツの農家と触れ合ったわけですが、彼らの考え方の深さを感じ入ったのです。農業という面でも機械化が進み、なおかつ、その機械を大事に大事に使っているということに魅力を感じました。それ以上に、ドイツの人達は理知的だが、愛に満ちているということに心を動かされました。当時まだ、ドイツは東西に別れていました。私は当然、西ドイツに行つたのですが、西ドイツの人達は、

「東ドイツは貧しい、それでも東の人達が私達を頼ってくればいつでも、引き受け、面倒をみる」と言っていたのです。この心の大きさに感動しました。そのとおり、ドイツ統一がなされ、旧東ドイツのために、西ドイツは特に、経済的に大きな苦しみを味わっていますが、それを当然のこととしていくようです。こうした経緯もあって、ドイツには親近感も持ちます。

また、最近行ったベトナムには、国の活力がみなぎっているという感じを受けました。深夜までバイクが走り回り（涼むためとのこと）、エネ

ギーがふつふつと沸いているようです。おそらくこれから伸び行く国となるでしょう。ただし、バイクはほとんどが日本車でした。

今年1月には、気の合った仲間とまたニュージーランドにいつてきます。平成6年に、我が国へ輸入解禁されたリンゴ事情を主に勉強してくるつもりです。農場ではやっています（実は20年前の入植当時、導入したのですが、失敗しました）、農場から東へ約70kmの距離にある私の実家で、妻と父母がリンゴを経営しており、私もたまに手伝っているためです。もちろん、妻も同行します。このようにして、外国を広く見聞し、自分たちの農業経営に活かしています。

後継者づくりは、広い範囲から

こうした視察活動のほかに、今年産農産物をどう作付けしていけばいいかを問うために、取引業者と懇談したり、依頼された講演活動などを行っています。

取引業者との話し合いでは、消費ニーズの動向が示され、これに応じた品質、形質、食味のものを生産することが求められることになりました。この点を考慮に入れた作付、栽培計画を練ることになるのはいうまでもありません。

講演では、農業関係者からの依頼だけでなく、中学生や、高校生を対象としたものもあり、こうした少年たちを対象にするとき、何を話せばよいか、なかなか難しいものがあります。しかし、筆舌に尽くせないような苦しみを味わいながらも、多くの困難を乗り越えて、夢に見た大型農場を成し遂げた足跡を紹介すると、目を輝かしてくれる少年たちも出てきます。そんなときは、講演してよかったと思います。

こうした若者たちが、農業という産業に魅力を

感じてくれれば、幸いです。

ただ、数年前の新聞に書かれていたことですが、都会では農業に引かれる人達が多いのに、農家の人達は子供が「農業を継ぐ」と言えばびくつき、なおかつ、やめてほしいと願うのが圧倒的だということです。これでは、農家出身の若者がソッポを向くのも当たり前です。農業者自ら自信を持った経営をして、後継者を受け入れる産業にしなければなりません。

この場合、私は資本・経営・技術の3要素を別々に後継してしまってもいいと思っています。そして、自分の子供だから、後を継がせるというのではなく、広く農業をやりたい者が後継していくシステムをつくりあげるべきだというのが、私の考えです。

それだけに、自分の子供には農業をやれ、とは一言も言わなかったのですが、専門学校を終えて2年間で有機農産物の流通を勉強した長男が、この春から実家で就農することになりました。また、この3月に信州大学理学部を卒業する農場代表の佐々木君夫の長男も、実家で就農するということです。佐々木も、子供の進路にはまるっきり口出ししないだけに、私同様、やや驚いています。

しかし、私どもの農場づくりが、子供達に何らかの影響を与えたのだと思うと、ちよっぴり嬉しくなる新しい年の春です。



きむら・しんいち／1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立